

現代日本文学に見る外国人留学生像

－ 宮本輝『彗星物語』のポラーニ・ボラージュー

膽 吹 覚

はじめに

現代日本小説において、日本で学ぶ外国人留学生を主人公として、あるいはその主たる登場人物として描いた作品は決して多くはない。私の知るところでは、リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』（講談社、1992年2月刊）、宮本輝『彗星物語』（角川書店、1992年5月刊）、デビット・ゾベティ『いちげんさん』（集英社、1997年1月刊）などである。これらの中から、本稿では、宮本輝『彗星物語』に登場する外国人留学生、ポラーニ・ボラージュの人物像について考察してみたい。なお、本稿における『彗星物語』からの引用は全て、『彗星物語』（角川文庫、上下2冊本、1995年3月刊）に拠った。

1. 宮本輝『彗星物語』

『彗星物語』の初出は、『家の光』（家の光協会）1989年1月号から1992年1月号まで全32回にわたっての連載である。宮本は1947年に兵庫県神戸市に生まれた人であるから、この連載が開始された1989年は、彼は42歳の年にあたる。この作品は、その後、1992年5月に角川書店より単行本『彗星物語』（上・下）として刊行され、1995年3月には『彗星物語』（上・下、松村友視解説）として角川文庫から、1998年7月には『彗星物語』（全1冊）として文春文庫から、それぞれ出版されている。また、1993年には『해성 이야기』（金賢姫訳、Korea one Press LTD）の書名で、その韓国語版が出版されている。さらに、本書を原作としたテレビドラマ「カミング・ホーム」が、TBSで1994年7月から9月にかけて全12回放映されている。このように『彗星物語』は、今日の日本では文庫本等で比較的容易に購入することができる作品であり、また、TVドラマ化されたことで周知の人もいるであろうが、以下の論述のために、そのあらすじを記しておく。

1985年の春、大阪府伊丹市にある城田家にハンガリー人民共和国からの留学生、ポラーニ・ボラージュがやって来た。彼は、この日から3年間、城田家にホームステイしながら、神戸大学大

学院で学ぶのである。ボラージュの日本での留学費用の一切は、城田家が面倒を見た。これは城田晋太郎が商用でハンガリーを訪れた折に、ボラージュの両親と約束したことであった。ボラージュのホームステイによって、城田家は、晋太郎の父の福造、晋太郎の妻の敦子、そして、晋太郎と敦子との間に生まれた4人の子どもたち。さらに、離婚して、子供を連れて城田家に戻って来た晋太郎の妹とその4人の子どもたち。そして、今年8歳になる年老いた牡のアメリカン・ビートル犬、フックの、総勢13人と1匹の大家族となった。

ボラージュが城田家に初めてやって来たその夜、城田家ではボラージュの歓迎会が開かれた。その会の後、晋太郎の妹のめぐみ家が家出をし、自殺を図ろうとするが、城田家の人たちやボラージュの活躍により、事なきを得る。その後も城田家では長女真由美の不倫騒動や、めぐみの長男の非行問題などが、次々に起こる。そうした中であって、ボラージュは城田家の人たちが驚くほどに日々勉強し、日本語を習得し、大学院での研究を進めていく。

しかし、その一方で、ボラージュと城田家の人たちとの間にも、少しずつ摩擦が生じ、トラブルが顕在化してくる。とりわけ、ボラージュの異性問題と彼の「自立」に関する問題をめぐって、ボラージュと城田家の人たちは衝突する。しかし、1988年の夏、城田家の人たちとボラージュが揃って出かけた白浜旅行で、両者はそれぞれの思いを述べ合い、わだかまりは解消する。この旅行から帰った後、ボラージュは、週末ごとに城田家に戻ることを約束し、城田家を出て、大学の留学生寮に入った。

その年の暮れ、ボラージュが留学生寮の友人5人を連れて、城田家でパーティーを開いた。このパーティーで、城田家の次男、恭太はケニアからの留学生、ウモニと出会い、医師になろうと決心する。また、長女の真由美は、この日に会ったイギリス人アランと、次女の紀代美はウモニと、それぞれ結婚へと進んでいく。

1988年3月、ボラージュは「江戸幕府崩壊と明治維新」と題する修士論文を提出し、大学院を修了。翌4月25日に、祖国に向けて日本を発った。ボラージュが帰国したその年の夏、城田家で長年飼われてきたフックが死んだ。城田家の人たちは、皆それぞれに、フックの死を知らせる手紙をボラージュへ送った。

2. ボラージュとイシュトヴァーン

The Teru's club (宮本輝公式ホームページ <http://www.terumiyamoto.com>) に拠ると、『彗星物語』は、宮本の実体験に基づいて書かれた作品である。

1982年、35歳の宮本は、朝日新聞連載小説(『ドナウの旅人』)の取材のためヨーロッパを歴遊していた。この旅行中のハンガリーのブダペストで、セルダハイ・イシュトヴァーンという青年が、宮本の通訳を担当した。その翌年、1983年、イシュトヴァーンは、宮本を頼って日本に留学し、神戸大学大学院修士課程で3年間学び、その後、帰国している。この間、宮本はイシュトヴァー

ンの日本での保護者を務めている。このときの宮本とイシュトヴァーンとの生活が、その後に『彗星物語』となって結実したのである。

このイシュトヴァーンという青年について、宮本は、1983年のヨーロッパ旅行を記した紀行文、『異国の窓から』の中で、次のように記している。(傍線部は膽吹が付した。以下、同様。)

その青年は、セルダハイ・イシュトヴァーンという名前だった。すりきれたジーンズに、黒いスニーカーを履いて、ドゥナ・インターコンチネタルのロビーで私たちを待っていた。予想していたよりも日本語は上手だったが、こみいった話が出来るといほどではない。ブダペスト大学で歴史を学んでいて、来年卒業の予定である。卒業論文のタイトルは「日露戦争の、ハンガリーにおける影響」だという。しかも彼の研究テーマは、「江戸幕府崩壊と明治新政府」なのである。それを彼はたどたどしい日本語で私たちに語った。

(『異国の窓から』、角川文庫、1991年刊、101ページ)

「しかし、ハンガリーに、日本の文化や歴史の専門家はいないでしょう」

そう私が訊くと、彼は、

「はい、いません」

とだけ答えた。ところが彼は、自分がその専門家となり、大学で教えるようになるのが子供のころからの夢だったのだと、しばらくたって恥ずかしそうに言った。

「日本に留学出来ないんですか？」

「出来ません」

「なぜ？」

「国は、コンピューターだとか機械だとかを勉強する学生にしか留学金を出しません。日本とハンガリーの物価は、大変に違いますから」

「じゃあ、あなたの夢はインポッシブル・ドリームということになる」

「はい。そうです」

(中略)

「インポッシブル・ドリームを、ポッシブル・ドリームにしてやろうじゃねえか」

私は、イシュトヴァーンに、日本に来るように言った。行きの飛行機代だけは、自分で工面しろ。俺の家に住んで、日本の大学の修士課程を卒業しろ、と。

(同上、102～105ページ)

前夜遅く、私と大上記者と池上さんは、セルダハイ・イシュトヴァーンの家を訪問している。彼の日本留学に際して身元保証人となる私は、彼の両親と逢う必要があったからである。母親は、親戚に不幸があったために留守をしていて逢うことは出来なかった。しかし、ブダペスト大学の言語学教授である父親は、突然息子の日本留学の招待を申し出たおかしな日本

人を、温厚な、礼儀正しい立居振舞いで迎えてくれた。(同上、108ページ)

これに対して、『彗星物語』のボラージュは、次のように紹介されている。

「おとうさんがハンガリーに行きはったときは、仕事も順調にいったんや。まさか、会社が半年後にあかんようになるなんて、おとうさんも想像もしてはらんかったんやもん。そのとき、通訳してくれた学生さんが、日本に留学したいというのが小学生のときからの夢やったと聞いて、よし、それなら一肌脱ごうと思いはったんや。」(上、17ページ)

「きょうから、我が家の一員となったポラーニ・ボラージュさんです。ハンガリーのブダペスト大学、正式にはエトボシュ・ローランド大学の史学科を卒業され、神戸大学の修士課程で日本の近現代史、その中でも〈江戸幕府崩壊と明治維新〉について学ぶため、3年間の予定で来日されました。ボラージュのお父さんは、ブダペスト大学の言語学の教授で、お母さんは小学校の体育の先生をなさっています。お兄さんは、昨年、司法試験に合格して、弁護士となりました。」(上、36ページ)

このように見てくると、イシュトヴァーンとボラージュとの共通点として、下記の5点を挙げることができる。

- ① ハンガリーのブダペスト大学史学科で学んだこと。
- ② 江戸幕府崩壊と明治維新について研究していること。
- ③ 子供のときから日本留学を夢見てきたこと。
- ④ ハンガリーを訪れた日本人(宮本輝、城田晋太郎)の通訳を務め、後にその日本人の好意で日本留学を果たすこと。
- ⑤ 父親がブダペスト大学の言語学の教授であること。

以上の点から見て、The Teru's clubに記載されているとおり、『彗星物語』に登場するボラージュのモデルが、イシュトヴァーンであることは間違いのないであろう。本稿では、しかし、あくまでも『彗星物語』に描かれた作中人物、ボラージュの人物像について論述するものであって、宮本がイシュトヴァーンという実在のモデルから、ボラージュという作中人物を作り上げた経緯や手法について論述するものではない。

3. 勤勉で優秀な留学生

『彗星物語』に登場するボラージュは、きわめて勤勉な学生として描かれている。渡日して2ヶ月が過ぎたころのボラージュの様子については、次のようにある。

もともと語学の才能に長じていたのであるが、6月に入ると、ボラージュは、城田家で

交わされる会話を、ほとんど辞書を使わなくてもこなせるようになった。彼が、日本へ来てから作成した単語や慣用句のカードは、1200枚にも及び、そのほとんどを、ボラージュは理解し暗記していた。しかし、そこに至るには、城田家の人間がみな感嘆を禁じ得ないほどの努力がなされていた。

ボラージュが帰宅するのは、たいてい夕方の5時ごろで、子供たちが夕食をとる7時まで、自分の部屋にこもって日本語の勉強をし、仕事で遅くなる者以外が揃う8時の食事が済むと、1時間テレビを観ながら、福造や敦子やめぐみと話をし、そのあと9時半から夜中の3時まで再び部屋にこもって勉強をする。(上、65～66ページ)

このように「城田家の人間がみな感嘆を禁じ得ないほどの努力」を重ねるボラージュに、敦子はその理由を訊ねると、彼は次のように答えている。

「ママ、ぼくには時間がないよ」

ハンガリー政府が彼に与えた留学期間は3年だった。時間が足りないので、もう1年日本での留学期間を延長してくれとハンガリー政府に申請しても、十中八九却下されるだろう。それが、ぼくたちの国の政府のやり方だ。ボラージュはそう言うのである。

それにもうひとつ、ボラージュは、修士課程に進んでいい成績を取れば、日本の文部省から奨学金が貰えるのだと敦子に説明した。奨学金の額は、1か月に15万円から17万円程度だという。それだけ貰えれば、授業料を払っても、なお多くのお釣りがくる。それを、自分の生活費としてママに渡したい。ボラージュはそう言って、敦子に微笑んだ。(上、66ページ)

ボラージュはこの言葉どおりに、彼は修士課程進学後、優秀な成績をとり、毎月17万円程度の奨学金を受給される。この受給は、ボラージュの学業が優秀であり、かつ神戸大学での彼の生活が品行方正であったことの結果であるといつてよいであろう。ボラージュ自身も、次のように語っている。

「俺がそう言うたら、ボラージュは、『ぼくはもうひとりで日本の生活をする能力がある。毎月、17万円の奨学金が貰えるようになった。それは、ぼくの成績が優秀だからだ。それは、ぼくの能力によって得た生きる糧だ。幸一の理論に従えば、ぼくには自立の権利がある。』あいつ、そない言い返しよった。(後略)」(下、25～26ページ)

『彗星物語』では、前章で述べたとおり、ボラージュと晋太郎は、晋太郎がハンガリーに出張したときに、彼の通訳をボラージュが担当したことがきっかけで知り合った。このことから推測すると、晋太郎と出会った当時のボラージュの日本語能力は、すでにビジネスで使用する日本語が使える程度であったと推測される。

ボラージュの修士論文のテーマは、しかし、「江戸幕府崩壊と明治維新」である。こちらは、

ビジネスで使う日本語とは大きく異なる。すなわち、彼が研究の対象とする史料は、主に18世紀から19世紀にかけての古文書である。これらの古文書の多くは、古文（文語文）や漢文（日本漢文）で書かれている。非漢字圏出身のボラージュにとって、古文や漢文を読み、それを分析することは、筆舌に尽くしがたい困難であったであろう。修士論文を書き終えたボラージュは、この困難について、次のように振り返っている。

「とにかく、この3年間、ボラージュは頑張ったなァ」

と晋太郎は言った。

「そうね、ぼくは、まあ頑張ったと思うね。修士論文を書くために、江戸幕府末期の古文書を15冊も読んだ。ひと晩に5行しか読めないときもあったよ。だって、辞書にも載っていない漢字で書かれてある……。ぼくは、ノイローゼになりそうだったよ。でも、勉強というのは、そういうものだから」
(下、155ページ)

こうした古文書との悪戦苦闘を経て提出されたボラージュの論文は、「<極めて緻密な研究と論法によって構成された斬新な日本近代史観である>と高く評価」(下、180ページ)された。そして、帰国後は、母校であるブダペスト大学で日本近現代史と日本語を教える講師として、教壇に立つことが内定するのである。

このように『彗星物語』に登場するボラージュは、現代日本語のみならず、18・19世紀の古文書に記された日本語の読解までも行うといった、きわめて高度な日本語能力を有し、かつ学生としての研究姿勢も勤勉であり、更にその成績や論文も大学側から高く評価されるなど、学業の面ではきわめて優秀な学生として描かれている。

4. ボラージュの祖国観

ボラージュは、25歳のハンガリー人である。『彗星物語』において、彼が来日したと設定されている1985年当時のハンガリーは、未だ社会主義体制のハンガリー人民共和国であった。ハンガリーが、現在の共和制に体制転換するのは、1989年10月のことである。それは、『彗星物語』では、ボラージュが日本留学を終えて帰国した1988年4月の1年半後にあたる。すなわち、ボラージュは、ハンガリー人民共和国時代（社会主義国家時代）の最末期に、日本に渡った留学生という設定で描かれている。また、文部科学省高等教育局学生支援課編『我が国の留学生制度の概要』（平成16〈2004〉年度版 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/05/04071201/all.pdf）によると、1985年に日本に渡日した外国人留学生の総数は、15,009人であった。この数字は、その後、増加し続け、2003年度には1985年度の約7倍の109,582人になっている。ボラージュは、日本における外国人留学生が未だ少数であった時代の留学生でもある。

ボラージュの留学目的は、前述のとおり「日本の近現代史、その中でも〈江戸幕府崩壊と明治

維新〉について学ぶため」であった。

彼が来日して10ヶ月が過ぎた1986年1月下旬のある日、恭太は将来、お金を貯めてハンガリーに行きたいとボラージュに語る。しかし、ボラージュは「ハンガリーなんて国はない」（下、184ページ）とつぶやき、ソ連の支配下にある祖国の現状を嘆き、「ぼくたちは、いつ自由になれるんだろう。ぼくたちの国は、いつ本当のハンガリーという国に戻れるんだろう。100年先かな。200年先かな」（下、185ページ）とつぶやいた後、さらに次のように語っている。

「ぼくは何のために日本に来たのかわからなくなったよ。ぼくは、ハンガリーでの安定した自分の生活のために、日本の近現代史を学ぼうと思ったんじゃない。ねエ、恭太、江戸幕府の崩壊と明治維新の樹立は、世界でも類例のない革命だった。薩摩や長州のいなか侍は、いったい何をやったんだろう。どうして彼等に、あの鉄壁の江戸幕府を倒すことが出来たんだろう。日本は、日露戦争でもロシアに勝った。第2次世界大戦で負けたのに、いまはこんなに栄えている。ミラクルな国だ。ハンガリーとは大きな違いだよ。その違いはどこにある？努力？運？国民性？ぼくにはわからなくなったよ。」（上、185～186ページ）

ボラージュが修士論文の研究テーマとして「江戸幕府崩壊と明治維新」を選んだ理由は、祖国ハンガリーに帰国した後の安定した生活－母校での大学教員－を得るためだけでなく、それはソ連の支配下にある祖国に「革命」を起こし、ハンガリーを真に自由で、独立した国家に戻すためであった。彼はその革命のモデルとして、明治維新という「世界でも類例のない革命」に学ぼうとして、来日したのである。

こうした留学目的を持つボラージュは、その来日当初からすでに共産主義批判を城田家の人たちに明確に示している。彼が初めて城田家を訪れた日の夜、晋太郎の父、福造の「ハンガリーは共産主義やな。ボラちゃんも共産主義者かいなァ」との質問に、ボラージュは、次のように返答している。

「それは、おじいちゃんのヘンケンです」

と言い、少し語気を強めて、

「ぼくたちハンガリーの若者は、ソヴィエトをきらいです。共産主義が、ぼくたちの国を貧しくさせている。でも、この共産主義は」

そこでまた辞書をひき、

「この共産主義は、ぼくたちがセンタクしたものではありません」

と言った。

（上、38ページ）

また、ボラージュは自らのハンガリー民族の民族性についても、次のように批判する。

ハンガリーは、人口比率で計算すると、世界で1番自殺率が高い。それは2位のフランスよりもはるかに高いのだ。いったいそれはなぜだろうと、何人かの心理学者や社会学者が研究

調査したが、明確な解答は出なかった。

自分にも、何人かの自殺した友人がいる。きのう、楽しそうにパーティーで酒を飲んでいたら友だちが、翌朝、首を吊って死んだこともある。これは自分の勝手な推測にしかすぎないが、自殺した友人たちに共通したものがひとつあるように思う。それは、何もかも他人のせいにするという性癖があったということだ。

ひるがえって、我がハンガリー民族、多くの栄光と、多くの苦難に包まれてきたマジャールという国家を考えると、そこにもひとつの共通点を見出すことができる。我々の国は、生きるということにいつも受け身だった。我々のすぐれた文化は、いつの時代においても、ヨーロッパでは異端だった。ヨーロッパに属する国でありながら、生みだされるものはヨーロッパ的ではなかった。我々は土着のヨーロッパ人に対して、いつも何かしら負い目を感じ、その負い目をいつしか責任転嫁という形の処世術にすりかえた。それが多民族国家であるヨーロッパの中の単一民族マジャールが身につけた詭弁だったのだ。そんな民族性に共産主義が植えつけられると、〈責任転嫁〉は公然たる個人の思想に変わる。(上、54～55ページ)

このようにボラージュは、『彗星物語』で、しばしば祖国ハンガリーの政治体制やハンガリー民族の民族性について、冷静に分析し、批判を下している。こうした批判は、しかし、祖国ハンガリーを今より良い国にしたい、というボラージュなりの愛国心の現れと見るべきであろう。ボラージュの愛国心は、「その鼻歌は、ボラージュが酔うと必ずくちずさむハンガリーの国歌であった。」(上、191ページ) という描写からも窺い知ることができる。

5. ボラージュと晋太郎

『彗星物語』は、1988年の春に、3年間にわたる日本留学を終えたボラージュが、ハンガリーに帰国するところで終わっている。ゆえに、『彗星物語』には、その翌年1989年10月に起こったハンガリーの体制変革、社会主義国家から共和制国家への転換は描かれていない。

前述のとおり、『彗星物語』の初出は、『家の光』1989年1月号から1992年1月号までの全32回にわたっての連載である。ハンガリーの政治体制が変革した1989年10月、『家の光』1989年10月号に掲載された『彗星物語』は、その第10回目(角川文庫版『彗星物語』第3章第2節に相当する)であった。すなわち、宮本は『彗星物語』全体の約3分の1の連載を終えた時点で、ハンガリーの体制変革を知ったのである。ハンガリー人留学生を主要な登場人物とする作品を雑誌に連載中の宮本が、ハンガリーの政変に無関心であったとは常識的に見て考えられない。宮本は、本作品の連載中に、ハンガリーの体制変革を知りながら、あえて『彗星物語』の結末に、それを書き加えなかったとみるのが自然であろう。

宮本は、ハンガリーが政治変革した後、すなわち1989年10月以降に発表された『彗星物語』第

5章第1節（『家の光』1990年4月号掲載分にあたる。角川文庫版との間に本文の異同はない。）の中で、城田晋太郎の言葉を借りて、ハンガリーの体制変革を予告するという手法をとっている。

「ボラージュが日本に着いて1か月ほどたったころ、晋太郎はわしにこう言いよった。『ハンガリーは、ほんとうにきれいな国や。民族性も優れてるし、17世紀から19世紀にかけては、ヨーロッパの文化の先頭に立ったときもある。ほくは、東ヨーロッパに大きな変革が起こるとしたら、そのときはハンガリーが重要な役割を果たすと思う。しかし、日本の政府は、そんな先のことを考えたりせん。いつかハンガリーに自由が訪れたら、日本政府は、そのとき、日本とのつながりが薄いことに慌てよるやろ。ほくは小さな力やけど、日本人を理解してるひとりの優秀なハンガリー人を育てたい。しかし、ボラージュは、このままでは必ずハンガリーに帰ってから失敗する。ほくは機会を見て、徹底的に、ボラージュの人間を鍛えるつもりや。』晋太郎が、わしにそない言うたのは、その日だけやあらへんで、言い方は違っても、おんなじ意味のことを何べんもわしに言いよった」（下、15ページ）

この発言からは、ハンガリーの将来を見通した日本人、城田晋太郎が、祖国ハンガリーに体制変革を求めるボラージュを、経済的、精神的に支援するという関係を読み取ることができるであろう。この関係は一見すると、外国人留学生を無償で援助する日本人と日本人に援助される外国人留学生、という構図で説明が可能である。が、しかし、ボラージュと晋太郎との関係は、上記の発言だけを取り上げて、そうした単純な構図でとらえることはできない。

そもそも晋太郎は、大型機械を扱う代理店の社長であった。晋太郎の会社は、従業員8名という小さな会社であったが、東欧諸国との取引実績があった。その実績をかわれて、東京のある重機メーカーの大型掘削機をハンガリー工業省に売る際、その業務代行を晋太郎の会社が担当したが、それが失敗したことで、会社は倒産。晋太郎は東欧諸国とのコネクションをかわれて、家具メーカーの相談役として再就職するが、それは彼にとって閑職でしかなかった。晋太郎は、もう一度、会社を立ち上げ、一花咲かせたいと思っていた。晋太郎自身、次のように語っている。

「俺の持っているヨーロッパの人脈を、そのまま放っておくのは勿体ない。そう思わんか？小さいながらも、俺の会社がちゃんと商売出来たのは、つまるところ、人間と人間のつながりがあったからや。ウィーンにも、ハンガリーにも、ユーゴスラビアにも、西ドイツにも、俺を信用してくれる人たちがいてる。俺の会社がつぶれたことを残念がってくれる人も多いんや。敦子、もう一回、俺に商売をさせてくれへんか」（上、108ページ）

晋太郎は「日本人を理解してるひとりの優秀なハンガリー人を育てたい」という一方で、ヨーロッパを舞台に、もう一度ビジネスマンとして活躍したい、と強く思っていた。晋太郎にとって、「日本人を理解してるひとりの優秀なハンガリー人を育て」ることは、穿った見方をすれば、彼にとっての有益なビジネス・パートナーを育成することに通じるのである。彼にとって、ボラー

ジュの日本留学費用一切を負担することは、ある意味、彼のビジネスへの投資の一環である、と見ることも出来るであろう。その一方で、ボラージュも、晋太郎に経済的に支援してもらうことで、子供のころから夢にまで見てきた日本留学を果たし、修士の学位を取得して、帰国後は母校の教壇に立つという、彼の個人的な目標が達成されるというメリットがある。

このように見て来ると、晋太郎とボラージュとの関係は、表面的にはハンガリーの将来を見通した晋太郎（日本人）が、祖国ハンガリーに体制変革を求めるボラージュ（外国人留学生）を、経済的、精神的に支援するという上下の関係に見えるが、その内側では、ビジネスマンとしてヨーロッパで再び活躍したいと願う晋太郎の思惑と、経済的な負担を負うことなく念願の日本留学を果たし、祖国での安定した地位を得ようとするボラージュの個人的な目標とが、Give-and-Take（持ちつ持たれつ）の関係で結びついていることが知られるのである。その意味において、ボラージュと晋太郎は、互いに利益を得る関係にあるといえるだろう。

6. ボラージュに見る異文化への移行体験

ピーター・アドラー（Adler, P, S）は、"The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock". (*Journal of Humanistic Psychology*, 15[4, Fall], 1975, pp.13-23) で、異文化と接触した人がカルチャー・ショックを契機として成長する過程をTransitional Experienceと名づけている。このTransitional Experienceを、磯貝友子氏は、「異文化への移行体験」と日本語訳し、次のように紹介している。

カルチャー・ショックをマイナス要因ではなく、自己の成長や滞在国の文化について、知識を高めるきっかけとして紹介したのはピーター・アドラーである。アドラーによるとカルチャー・ショックを経験するということは、その国の文化を理解しようとしている証である。すなわち、カルチャー・ショックを経験する者は、より良くその国の文化を理解し適応しようとしている、ということになるのである。（中略）最近ではカルチャー・ショックは避けるものではなくむしろ克服し、自己を大きく成長させるものとしてとらえられている。その成長過程をアドラーは「異文化への移行体験」と呼んでいる。（中略）では、成長過程を5つの段階に分けたものをここで紹介しよう。

（中略）

第1段階：異文化との接触

文化的差異に興味をそそられる。新しい文化を自文化の視点から見る。文化の深い違いは認識されない。共通点が目につく。

第2段階：自己崩壊

人の行動、考え方や価値観の違いが衝撃的に大きく目につく。それが頭から離れない。

第3段階：自己再統合

自文化と滞在国との文化の差を拒絶する。

第4段階：自律

文化の共通点と相違点をありのままに受け入れることができる。

第5段階：独立

文化の共通点と相違点をマイナスとしてではなく、プラスにとらえられるようになる。

(八代京子他著『異文化トレーニング』、三修社、1998年刊、249～254ページ)

1985年4月、来日したボラージュは、成田空港から東京駅に向かい、そこで新幹線に乗り換えて新大阪駅に向かう。新大阪駅には晋太郎が出迎えに行っていた。新大阪駅からタクシーに乗ったボラージュは、その日の3時半過ぎに城田家に到着。出迎えた敦子と福造に日本語で挨拶を交わした後、日本に到着したことを国際電話でハンガリーの両親に知らせた。以下は、その時のボラージュの様子である。

晋太郎は国際電話局を呼びだし、ブダペストのボラージュの実家の電話番号を言った。やがて、ボラージュの口から、早口のハンガリー語が、家中に響き渡るほどの大声で吐き出された。おそらく長旅による疲れと、昂揚と緊張によるものと思われるボラージュの青白い顔は、見るまに朱色に変わった。

もとより、敦子にはハンガリー語はまったくわからなかった。しかし、たったひとつだけ、敦子が知っている言葉を、一段と高く、ボラージュは受話器を握りしめて叫んだ。

「ファンタスティック！」

敦子は、ボラージュが涙ぐんでいるのに気づき、彼から視線を外した。

(上巻、25～26ページ)

日本留学は、子供のころからのボラージュの夢であった。「ファンタスティック！」というボラージュの叫びは、憧れの国、日本に留学できたことによる興奮、幸福感を表現しているといっ
てよいであろう。そして、それは、アドラーの説く第1段階「異文化との接触」の感情と符合するものである。

このように希望に胸を膨らませて、日本での留学を始めたボラージュであるが、その後2ヶ月ほどすると、実際に目にする日本社会に驚き、時には戸惑い、やがて彼の中に混乱が生じ始める。日本人の大人が電車内で漫画を読んでいる光景に驚いたボラージュは、次のように敦子に語る。

「ぼくは日本に来て一番びっくりしたのは、電車の中で、大学生や社会人が漫画を読んでいること。ハンガリーで漫画を読むのは、子供だけ。ハンガリーだけじゃないよ。ヨーロッパで、漫画を電車の中で読んでいる大学生とかおとななんていない。どうして、日本人は、

おとなが漫画を読みますか」

敦子は、自分が恥ずかしがることはないのにも思いながらも、顔が赤くなった。敦子は、どう答えていいのかわからなくて、

「昔は、日本でも、大学生やおとなは、漫画を読まなかったわねエ。でも、おとなが読む漫画は、ハンガリーにだってあるでしょう？日本でも、おとなの読む漫画はあったわねエ」

「でも、電車の中で読んでいる漫画は、とても下品なものばかり。もうほとんどがポルノだよ。そんなものを、電車の中で読んでいる日本人が、どうしてこんなにも日本を経済発展させた？ぼくにはわからない」 (上、89ページ)

また、ボラージュは、初めて経験した日本の梅雨のせいで、心身ともに不調をきたす。それは、ボラージュが自らがソ連のKGBによって尾行されている、と敦子に訴えるほどであった。そんなボラージュに、敦子は、次のように優しく語りかける。

「ボラージュは疲れたんやね。疲れたら、人間は幻覚を見るっていうから。」

と母の敦子は、どこかのんびりした優しい口調で言った。それは恭太が熱を出したりジンマ疹を痒がっているときに、励ましや慰めの言葉を投げかける際の口調と同じだった。

けれども、ボラージュは、頭をかかえ、怒りの声で言い返した。

「この日本の梅雨は、いったい何だ。空気が重くて、頭や胸が苦しくなる」

「はじめての、日本の梅雨やからね。日本で生まれ育った私らでも、この時期は体の調子が悪いわ」

「オーストラリアから来た留学生は、梅雨が始めると自分の国に帰ってしまう。彼は、いつでも好きなききに、自分の国と日本とを行き来してる。でも、ぼくはそれが出来ない。一度ハンガリーに帰ったら、4年間は西側へは行けない」 (上、127～128ページ)

このようにボラージュは、電車内で漫画を読む日本の大人たちと経済大国日本との間に整合性が見出せなかったり、梅雨という日本特有の風土に適応できなかつたりして、その留學生活にいくつかの混乱が生じてくる。そして、それらの混乱が相まって、やがて孤独感や苛立ちへと移行していくのである。この時期のボラージュは、まさしく第2段階「自己崩壊」のレベルにあるといえるであろう。

その後、ボラージュが城田家の人たちと融合していくにしたがって、城田家の人たちとボラージュとの間に些細な諍いが絶えなくなる。

「敦子が、最初にボラージュと衝突したのは、彼の異性問題に関してであ(下、6ページ)」
った。ボラージュが城田家にホームステイして1年半が過ぎたころ、敦子はボラージュに日本人の恋人ができ、2人が肉体関係にあることを知った。ボラージュは、しかし、そのことを敦子に告げていなかった。そこで敦子がボラージュを問い詰めると、彼は、次のように答えた。

「でも、ぼくがどんな女とつきあおうと、パパやママの責任じゃないでしょう？ぼくはもうおとなで、相手もおとな。ハンガリーでも、ぼくには恋人がいた。だけど、その女を父や母に紹介するかどうかは、ぼくの自由。ハンガリーだけじゃないよ。ヨーロッパではみんなそうだよ」

「ここはハンガリーとは違うの。ここは日本なのよ」

「へえ、じゃあ、ぼくは、友だちが出来るたびに、パパやママに報告しなければならない？日本人は、みんなそうするの？」
(下、7ページ)

ボラージュは、恋愛に関する自らの行動が、ハンガリー（自国）やヨーロッパ（自文化圏）ではそれが常識であり、それを否定する敦子、ひいては彼女が所属する日本人（滞在国）の価値観が非常識であると反論する。

彼は、また、城田家を出て、大学の留学生寮に入りたいことを、幸一に打ち明けるときも、次のように語っている。

「来年、ハンガリーに帰るまで、留学生の寮で暮らしたい。そやけど、パパもママもおじいちゃんも怒るから、幸一に助けてもらいたい。あいつ、そない言いよるねん。それだけやったら、俺もそんなに腹を立てへんかったんやけど、あいつ、『ぼくも幸一みたいに自立したい』って言いやがった。ボラージュの言う自立っていったい何やねんと訊いたら、ヨーロッパでは、みんな大学生になったら親から離れて自立する。それは当然の行為でもあるし、おとなになったことに対する権利でもある……。あいつ、そう言いよった」(下、24～25ページ)

ここでもボラージュは「ヨーロッパでは」と、再び自らの文化圏を基準に挙げて、その行動の正当性を主張している。彼は、自文化（ハンガリー・ヨーロッパ）と滞在国（日本）の文化との差を拒絶しているのである。ゆえに、この頃のボラージュは、アドラーの説く第3段階「自己再統合」に達していると見てよいであろう。この段階におけるボラージュの不安や怒りは、かつては留学を希望するほどに憧れていた日本に対して、ときには悪口を交えるまでに至っていた。

このように日本へのフラストレーションを強めるボラージュも、その後、次第に落ち着きを取り戻していく。

白浜旅行から帰った後、城田家を出て、留学生寮に移り住んだボラージュは、この年の大晦日、城田家に戻っていた。この日、ボラージュは、福造とチェスの勝負をした。チェスには自信があったボラージュだが、福造との勝負は7戦7敗。そこで、福造は、ボラージュの相手に孫の恭太を指名する。恭太は福造から将棋の手ほどきを受けていたので、チェスの駒の動かし方もすばやく理解し、彼はボラージュを後一步というところまで追い詰め、「さあ、これからやぞォ」と何度も自らに言い聞かせるように呟き続けた。すると、ボラージュは、恭太のその呟きに苛立ち、

次のように言う。

「だって、恭太はもうほとんど勝ったのと同じ。それなのに、どうしてそんなことを言う？それは、ぼくに対する嫌味。意地悪な、サディスティックな嫌味」

「そやけど、ほんまに『これから』やもん。ここで、ぼくが失敗したら逆転されるでエ。ボラージュも、ここをしのいだら、逆転するチャンスが出来るでエ。ぼくもボラージュも、『これから』やで」

恭太は何の嫌味もなく、幼いころから福造と将棋を指してきて教わったことを口にしたただけだった。けれども、思いもかけない敗北をつづけて、怒り心頭に発していたボラージュの表情が穏やかになった。(下、120～121ページ)

そして、年が明けて、ボラージュが修士論文を提出した翌日、ボラージュは城田家の人たちと揃って、近所の写真館で記念写真を撮影した。その帰り道、ボラージュは、晋太郎たちに、次のように語っている。

「とにかく、この3年間、ボラージュは頑張ったなァ」と晋太郎は言った。

「そうね、ぼくは、まあ頑張ったと思うね。修士論文を書くために、江戸幕府末期の古文書を15冊も読んだ。ひと晩に5行しか読めないときもあったよ。だって、辞書にも載っていない漢字で書かれてある……。ぼくは、ノイローゼになりそうだったよ。でも、勉強というのは、そういうものだから」

ボラージュはそう言ったあと、

「でも〈これから〉だ。ぼくの闘いは〈これから〉だ。ぼくは、それを恭太に教えてもらった」

とつぶやき、照れ臭そうにフックを追いかけ、再び抱きあげた。(下、155ページ)

ボラージュは、「これから」という考え方を、チェスを通して恭太から教えられと、素直に晋太郎たちに話している。彼はリラックスして、城田家の人たちに温かく接することができるようになったのである。こうした変化は、アドラーの第4段階「自律」のレベルで見られる現象である。

ボラージュの帰国が目前に迫った1988年4月11日、城田家の長女真由美とボラージュの友人であるイギリス人留学生、アラン・マッキントッシュが、2人揃って、真由美の両親に結婚を申し込む。ボラージュは、その場に同席し、次のように真由美とアランの応援をする。

「アランのお兄さんは、ひとりアメリカ人と結婚して、ニューヨークで仕事をしてる。もうひとりのお兄さんは西ドイツのベルリンで仕事をしてる。2人ともロンドンで生活する気はないよ。だから、アランのお父さんの家は、アランのものになる。つまり、家賃がいら

ない。真由美も、アランと結婚したら、自然に英語が喋れるようにならなければいけないしね。そしたら、ロンドンで、日本人のための通訳の仕事ができるでしょう？アランの給料は、まだ少ないけれど、彼も日本語の出来る貴重なイギリス人だから、大学での仕事以外に、別のアルバイトも出来る。パパもママも、生活費のことは心配しなくてもいいよ」

まるで熱心な仲人みたいに、ボラージュは説明し、熱燗の酒を飲んで、

「うん、この酒は甘口。もうちょっと辛口の酒のほうがお寿司に合うね」

と言った。

(下、177ページ)

真由美とアランを援護するボラージュは、時にユーモアを交えながら、「まるで熱心な仲人みたいに」、生き生きとしている。そこにはこの日本留学を経て得た自信のようなものが感じられるであろう。この段階をアドラーは第5段階「独立」と呼んでいる。

このように『彗星物語』に描かれた外国人留学生、ボラージュの留学生生活は、アドラーが説く「異文化への移行体験」で説明が可能である。『彗星物語』には、たしかに城田家の人たちとボラージュとの間で生じたさまざまな諍いが描かれている。その意味において、彼はその時々では、城田家で起こるトラブルの一因であったかもしれない。しかし、それらのトラブルは、アドラーが説く「異文化への移行体験」に従って観れば、そこには、日本でのさまざまなカルチャー・ショックを避けるのではなく、むしろそれらをプラス要因とし、よりよく日本文化を理解し、適応しようと努力する外国人留学生、ボラージュの姿が見えて来るのである。

7. 成長するホスト・ファミリー

『彗星物語』には、ボラージュの成長と合わせて、城田家の人たちの成長も描かれている。その中から城田家の次男、恭太の成長を見てみよう。ボラージュが城田家に来た1985年3月、恭太は小学校5年生であった。『彗星物語』には、次のように描かれている。

恭太は、敦子が39歳のときの子だったから、ことし11歳で、もうすぐ小学校6年生になる。何事につけても、晩生で、病弱だったので、敦子と晋太郎は、しばしば、恭太を自閉症ではないか、とか、もしかしたら知恵遅れなのではないか、とか案じて、専門医の診断を受けさせたものだった。しかし、医学的には問題なく、

「つまり、何かにつけて晩生だってことですか」

という医者言葉どおり、小学校では5年間を通じて、その学年ではつねに一番体が小さく、成績も悪く、口数の少ない、欠席日数の多い生徒として、まもなく6年生になるのであった。

(上、10ページ)

来日後のボラージュは、前述のごとく、「城田家の人間がみな感嘆を禁じ得ないほどの努力」

をし、日に日に日本語を習得していった。しかし、そんな彼も初めて経験するに梅雨にはほとんど困惑し、その精神に不調をきたす。そうしたボラージュの様子を見た恭太は、次のように思うのであった。

ボラージュの耳元で笑って言いながら、恭太は、いつか自分も病気になるくらい勉強しなければならぬと思った。何を、どのように、何のために勉強するのか、いまのところ検討もつかなかつたが、勉強という言葉に、なぜか痺れるほどの魅力を感じたのは、生まれて初めてであった。
(上、139～140)

ボラージュの直向きな姿勢に、恭太は生まれて初めて「勉強という言葉に、なぜか痺れるほどの魅力を感じた」のであった。

この出来事があってから2年後の1987年12月28日、ボラージュが大学の留学生仲間5人を連れて、城田家に来てきた。ボラージュは、この年の夏より城田家を出て、大学の留学生寮に寄宿しており、恭太は、この年、中学校2年生になっていた。

この日、ボラージュといっしょに城田家に遊びに来た留学生の中に、ウモニというケニアからの留学生がいた。ウモニ(愛称はウモ)は、恭太の手のひらに、朱色の石を乗せて、こういった。

「恭太にあげます」

と言って微笑んだ。この世に、こんなにも白い歯があるだろうかと思いながら、恭太はウモの微笑と朱色の石を交互に見つめた。

「ぼくがもろてええのん。ウモの宝物やろ？」

「恭太にあげます」

恭太は、こんなにも大切なものを、ウモが、どうしてこの自分にくれるのかわからなかった。

「なんで、ぼくにくれるの？」

と訊いた。

「たくさん勉強して、大きくなったらケニアに来なさい。この石を、ぼくに返すために、ケニアに来なさい。アフリカには、医者が少ない。素晴らしい医者になって、アフリカの病人たちを救いに来なさい」

「医者？」

恭太は、医者になろうなどとは考えてもいなかったが、なんだかウモの言葉に、戦慄に似た物を感じた。

(中略)

恭太は、掌の中の、朱色の丸い石を見つめた。なんだかわけのわからない巨大な物が、自分の中に入って来たような気がした。

自分は頭が悪いのだろうか。それとも、努力が足りないのだろうか。自分は、どうして成

績がよくなるのだろうか……。

恭太は、あしたから、いつもより2時間、勉強の時間を増やそうと決め、ウモにもらった石で、自分の胸をたたいた。
(下、103～106ページ)

ウモニから朱色の石をもらったその3日後、1987年の大晦日、恭太は、再びボラージュの勉強ぶりを思い起こし、次のように決心する。

恭太は、ふいに、自分もボラージュを真似てみようと思った。ボラージュに出来て、この自分に出来ないわけではない。休みの日は、1日15時間勉強しよう。コンタクトレンズなんて、もうどうでもいい。そのお金で、学習塾の、短期集中講座を受けよう。きょうから10日間、英語と数学の、中学1年生の教科書と参考書を徹底的にやり直そう。

そう決心したとたん、恭太は、医者になろうと思った。自分の弱い心を、ウモから貰った石で叩きつぶしながら勉強しよう……。

恭太は、医者になってアフリカに行った自分が、ウモやウモの家族たちと再会している情景を想像した。
(下、111～112ページ)

恭太は、医者になろうと決心した。彼は、外国人留学生であるボラージュやウモニと出会い、彼らから、一所懸命に勉強すること、直向きに努力すること、己の弱い心を克服することなどを学び、将来について、医師という具体的な職業を思い描くまでに成長したのである。

恭太が、医者になるという目標を持ったその年の4月、ボラージュは予定どおり、3年間の日本留学を終えて、ハンガリーへ帰国することになった。その帰国前に開かれたボラージュの送別会で、恭太は、誰に言われるのではなく、自発的にボラージュへの驢のスピーチをした。3年前は、医者から「何かにつけて晩生だ」といわれた息子が、今が堂々とスピーチを終えて、そのマイクをウモニに渡したとき、母である敦子は、次のような感慨を持つ。

敦子はそっと会場から出て、トイレに入り、ハンカチで涙を拭いた。それはきっと、ボラージュのおかげだと思った。ひとつ1つは言葉にできないにしても、恭太がボラージュという青年から得たものは数限りないのに違いない、と。
(下、222～223ページ)

敦子は、息子、恭太の成長の背後に、ボラージュの存在を見ている。彼女は、ボラージュに感謝の意を表しているのである。このように恭太は、外国人留学生であるボラージュやウモニから影響を受けて、3年間で大きく成長した。そこに、ホスト・ファミリーの成長を促し、助ける存在としての外国人留学生像を看取することができるであろう。

敦子もまた、ボラージュとの3年間の生活を通じて、彼から影響を受けて成長した。城田家の人たちとボラージュがそろって白浜へ海水浴にでかけた時、敦子は、2年半という期間、ボラージュをホームステイさせたことについて、次のような思いを吐露している。

だが、自分たちは、確かに、わざわざ自分からよそ者を招いたのだ。このボラージュというよそ者は、いつの日か、みんなのために働く人になってくれるだろうか。

東ヨーロッパが、どのようになっていくのか、世界がどう動いていくのか、敦子には到底推し量ることは出来なかった。ボラージュが城田家にやってこなかったら、敦子は、そんなことどころか、ハンガリーという国のことすら知らずに生きていたに違いない。

(下、54ページ)

敦子はボラージュを城田家に招いたことで、ハンガリーや東ヨーロッパについて学ぶ機会を得たことを喜んでいる。そして、彼女はボラージュが帰国する前、家族で記念写真を撮った帰り道、ボラージュに、次のように語りかけている。

すると、敦子は、穏やかな口調で、

「自己主張するっていうことに対する考え方が、日本人と西洋の人とは違うのよ。私は、やっとそのことがわかってきたわ」

と言い、

「わかりかけたときには、ボラージュはハンガリーに帰ってしまう」 (下、156ページ)

敦子はボラージュを城田家に迎え入れることで、ハンガリーや東ヨーロッパへの興味関心が芽生え、そして、日本人と西洋人との思考の相違について理解を示すようになった。彼女はボラージュとの生活を通じて、異文化理解を深化させていったのである。こうしたホスト・ファミリーの異文化理解を進めることも、また、ホスト・ファミリーの成長を促し、助ける存在としての外国人留学生像の一面として解釈することができるであろう

むすび

本稿における考察を総合すると、『彗星物語』に描かれた外国人留学生、ポラーニ・ボラージュの人物像は、次のようになるであろう。

- A) 日本語能力が高く、きわめて勤勉で、学業成績が優秀である。
- B) 祖国への愛国心を抱き、日本留学で学んだことを、祖国の発展ために生かしたいと考えている。
- C) 日本でのカルチャー・ショックを避けるのではなく、むしろそれらをプラス要因とし、よりよく日本文化を理解し、適応しようと努力し、成長していく。
- D) ホスト・ファミリーの成長を促し、助ける存在である。
- E) ホスト・ファミリーにとって、異文化理解のきっかけとなる。

私はかつて「現代短歌に見る外国人留学生像」(『城南国文』第24・25合併号、2005年7月刊)

で、1994年から2003年までの10年間に朝日新聞（朝刊）の「朝日歌壇」に掲載された短歌を対象として、そこに描かれた外国人留学生像を考究し、その結果として、下記の5点を指摘した。

- (ア) 学業に励み、澁澁とキャンパス・ライフをおくっている。
- (イ) 祖国に対する誇りや確固とした民族意識を持っている
- (ウ) 祖国が抱える問題、あるいは留学生の個人的な悩みを抱えている
- (エ) 作者（日本人）にとっての異文化理解のきっかけ
- (オ) 留学生の出身国を象徴する存在（歴史認識を問う通路としての外国人留学生）

上記の現代短歌に見る外国人留学生像と本稿で考察したボラーニ・ボラージュの人物像とを比較すると、(ア)はA)と、(イ)(ウ)はB)と、(エ)はE)と、それぞれ一致するといつてよいであろう。(オ)については、ボラージュの人物像とは関係ないが、城田家に遊びに来た中国人留学生に向かって、福造が次のように語りかける場面がある。

福造は、2人の中国の留学生に、

「ご出身はどこですか？」

と訊いた。ひとは福建だと答え、ひとは南京だと答えた。

「南京……。わしも南京に2か月いてました。病気をして、すぐに陸軍病院に帰されましたけど。わしらの年代の者で、兵隊にかりだされた連中は、南京という言葉を聞くと、いたたまれんようになる。誠に、日本人は、中国人の皆さんに非道なことをいたしました。戦争責任者たちになりかわりまして、お詫び申し上げます」

福造は真顔で、2人の中国人の青年に深々と頭を下げた。リュウくん、ヤンくとみんなに呼ばれている2人は、困惑の表情で、軽く頭を下げ返した。 (下、100ページ)

このように見て来ると、『彗星物語』に登場するボラージュの人物像は、現代短歌で描かれた外国人留学生像と重なる部分が多いといつてよいであろう。しかし、その一方で、『彗星物語』のボラージュに見られたC) D)の人物像に相当する短歌を、私稿「現代短歌に見る外国人留学生像」で考察した14首の短歌から見出すことができなかつた。ゆえに、C) D)は、現代短歌に見る外国人留学生像にはなく、『彗星物語』に登場するボラージュに特有の人物像である、ということが言えるであろう。日本人家庭にホームステイすることによって成長していく外国人留学生、ボラージュ。そのボラージュの影響を受けて、成長していく日本人ホスト・ファミリー。そこに、現代短歌では描かれることがなかつた外国人留学生像、すなわち、外国人留学生と日本人が、互いに影響し合い、共に成長していく姿を看取することができるのである。